

行教と一切経

——『今昔物語集』卷十二第10話・『大安寺塔中院縁起』と絡めて——

生 井 真理子

一、はじめに

大安寺の僧、行教が、山崎津の対岸に石清水八幡宮を建立したことはよく知られている。石清水八幡宮には根本縁起として、奥書に「行教自身の名が記される『護国寺略記』と、奥書が長徳元年（九九五）で、新たに旧記等を参考に造られたという長徳の『遷座縁起』の二種がある。両縁起ともに、「行教の遺言」ともいえるべき最後の箇所には、一切経書写の継続と完成を、弟子安宗に託すことが記される。『護国寺略記』の奥書は、貞観五年正月十一日付けで、行教の忌日は一月十八日である。そして、『三代実録』貞観十七年（八七五）三月二十八日の条には、故太政大臣藤原朝臣（＝良房）が清和天皇の御代がよく治まり、人民を安らかにすることを望んで、八幡大菩薩のために一切経書写の願を発し、故行教を檢校（責任者）

にして行わせたが、その遺志を継いで、安宗が一切経を弥勒寺に収めた、とある。安宗は行教の後を継いで、石清水八幡宮の初代別当となり、八幡宮と護国寺の基礎を作り上げた、大安寺の学僧である。長徳の『遷座縁起』によれば、天安三年（八五八）清和天皇が即位した時に、宇佐宮使として「修練加行」の僧を求め、大僧都真雅が推薦したのが、「大安寺伝燈大法師位行教」だったという。翌年の貞観元年（八五九）、太政大臣良房の命によつて、宇佐使と一切経書写の任務を帯びて、即位報告をする勅使とほぼ同じ頃、都を出発したという。時に、清和天皇はまだ数え年で九歳という幼帝で、実質、政治を動かしていたのは、太政大臣藤原良房である。このことから、藤原良房の娘、明子が生んだ清和天皇が即位するにあたり、清和天皇のために、太政大臣藤原良房が、行教に八幡神を勧請させた、という見方がほぼ定説となっている。この点について異論はな

い。しかし、その理由を清和天皇のための「飾り」や「権威付け」と見ると、なぜ八幡神なのか、なぜ行教は国ごとの諸明神に三十三人の得度者を申請したのか、あるいは一切経書写の目的や、大安寺の行教伝承の存在の意味が分からなくなってしまうだろう。八幡神への一切経書写奉納は、むしろ文徳天皇の時代状況と、東大寺大仏の大破が関係していると思われるからである。

二、八幡大菩薩と即位報告

嘉祥三年（八五〇）三月二十一日、仁明天皇が崩御し、文徳天皇が即位した。その四日後、第四皇子の惟仁親王が誕生する。母は藤原良房の娘、明子である。文徳天皇の母は藤原順子で良房の妹である。十一月二十五日には、惟仁親王がわずか生後九か月で立太子した。従来からすれば、異例のことである。文徳天皇は、四月には仁明天皇の深草山稜に、六月には伊勢太神宮に即位を報告、八月五日には諸国諸神へ班幣と即位報告の後、十二日に賀茂社・松尾社に勅使を遣わして即位を報告を行う。続いて二十三日には九州の香椎廟と八幡宮へ、散位従五位下高原王を使いとして遣わし、宝剣・明鏡・名香・綵帛等を奉った。これも即位報告であろう。

桓武・平城の時代には即位報告は伊勢太神宮だけであった。だが、弘仁元年（八一〇）九月に起きた葉子の変を機に、都の地主神賀茂

社と、九州の八幡宮・香椎廟の位置が大きく上昇する。平城上皇の奈良遷都の動きを、長らく病床にあった嵯峨天皇はすばやく封じ、平城上皇は出家、皇太子の高岳親王は廢太子となり、嵯峨天皇の弟の大伴親王が立太子した。事後処理が落ち着いた十二月十六日には、参議正四位下巨勢朝臣野足を遣わし、八幡大神宮・香椎廟に、乱鎮靜の感謝として幣帛を奉っている。

『日本後紀』には特に賀茂社への記載はないが、葉子の變の際、嵯峨天皇が乱鎮靜の後には、伊勢と同じく皇女から齋王を立てようと祈願したといわれ、有智子内親王が初代齋院となり、弘仁九年（八一八）五月二十二日には齋院司も設置された（『類聚国史』）。京都に都が移されてから、桓武天皇以後、地主神として、上・下賀茂社の神職への待遇も含めての崇敬は厚かったが、葉子の變が奈良への遷都問題に絡んでいただけに、その期待と厚遇は当然とも言える。しかし、桓武・平城の時代には、さして国史に現れなかった八幡宮・香椎廟が、なぜ葉子の變の際、戦勝祈願の対象となったのか。おそらく、それは藤原仲麻呂の乱が、〈上皇 对 天皇〉の対立の構図で類似していたことによるだろう。淳仁天皇の後見役を以て実権を握っていた藤原仲麻呂が、道鏡を除くことを求めて挙兵した際、孝謙上皇は勝利祈願のために西大寺建立を発願し、八幡神に援護を祈った。八幡神は「隼人の反乱」「藤原弘嗣の反乱」で、祈る者を

勝利に導く軍神としての実績を持っていた。また、香椎は仲哀天皇が熊襲制圧に赴き、この地で亡くなったゆえの廟で、神功皇后と仲哀天皇を祀るといわれる。『日本書紀』において、神功皇后が胎内に、後の応神天皇を宿しながら、男装して新羅と戦ったことは名高い。神功皇后は、仲哀天皇の皇子で兄の二人を戦いで退け、弟にあたる応神天皇を皇位に即ける。つまり、香椎は皇祖神であると同時に、大陸からの防衛を請け負う神であった。聖武天皇は新羅対策に香椎廟に奉幣、藤原仲麻呂も新羅征討のために香椎に奉幣している。

とすれば、嵯峨天皇としては、薬子の変の混乱に乗じて、西側から外国が攻めたり、九州で反乱が起きないように祈願したものであるうか。しかも、弘仁六年（八一五）十二月十日の大宰府解によれば、神主大神清磨が、八幡大菩薩は「品太天皇（応神天皇）御霊」であることを主張している。現存の『東大寺要録』引用の大宰府解では「件大菩薩是亦太上天皇御霊」となっているが、文意が通らず、「弥勒寺縁起」や『諸起記』と照らし合わせても、平野博之氏が指摘するように明らかに誤写である。『宇佐御託宣集』^①では、伝承が混交しているが、九州では神功皇后を思わせる女神は大帯姫と呼ばれる。『宇佐御託宣集』巻四に、「嵯峨天皇御宇弘仁年中に託宣有り、大帯姫は皇后の靈誕なることを示現する也」とある。弘仁十四年（八二二）四月十四日の官符によれば、この弘仁十一年（八二〇）の神託

で、宇佐宮に大帯姫のために新たな「細殿」（齋殿・祭殿の当て字か）に加わることになる（『諸起記』）。

この官符が出された二日後の四月十六日に嵯峨天皇は讓位して、淳和天皇が即位した。十一月二十四日に左兵衛督四位上藤原朝臣綱継を使として、八幡大神・檉日廟（香椎廟）に幣帛を奉ったのは（『三代実録』）、大帯姫＝神功皇后の新祭殿の検分と即位報告を兼ねるものであっただろう。翌年の天長元年（八二四）九月二十七日には、和氣真綱・仲世たちが奏上して、故父たる和氣清麻呂が建立した神願寺を廢し、替わりに高雄山寺を定額寺とすることを許されている。高雄山寺は神護寺となり、空海に付託されることになった。

和氣真綱たちの奏上によれば、神護景雲年中に法王道鏡が皇位を狙い、称徳天皇の命令で宇佐に下った和氣清麻呂が八幡大神から、「皇位は皇孫を立てるべし」との神託を受けた際、仏力の加護を受けて八幡神の靈力を強化するために、和氣清麻呂は一切経書写と佛像を造り、最勝王経を二万巻諷誦し、一伽藍を建立するよう命じられたという。和氣清麻呂は神願寺を建立するが、一切経の書写は果たせなかつたらしい。『日本後紀』の和氣清麻呂卒伝には、和氣清麻呂が称徳天皇の怒りを買って流罪になった時には、藤原百川がひそかに生活の援助をしたと伝える。淳和天皇は藤原百川女を母とする。和氣清麻呂とその長男弘世は桓武天皇の側近となり、五男真綱

は弘仁六年（八一五）に春宮大進となるなど、淳和天皇の春宮時代から仕えていた関係にある。

天長六年（八二九）には宇佐の弥勒寺で一切経転読を行わせ、大宰府に命じて一切経の書写をさせていた淳和天皇は天長十年（八三三）二月二十八日に譲位し、嵯峨天皇の皇子正良親王が即位して仁明天皇となる。四月五日には従四位伊予権守和氣真綱が勅使となつて、八幡大菩薩宮・香椎廟に即位報告を行い、御剣・幣帛を奉つた。この頃、恵運を観世音寺講師、筑前国講師として九州に送り、一切経書写の勾当を行わせた。十月二十八日には大宰府に命じて、宇佐の弥勒寺に、完成した一切経写本を収めたが、その上にもう一セツトの一切経を神護寺に安置したのは、和氣真綱たちの奏上に応えた形である。さらに、淳和天皇は神護寺に五大明王堂も建てた。文徳天皇が即位した年に八幡宮に勅使を遣わすのも、この流れを受け継いだものといえる。

三、災害と疫病

だが、文徳天皇の時代は決して平穏な時代ではなかった。『文徳実録』には在位八年の間に、九十九回もの地震の記録が残されているように、度々の自然災害に見舞われた。『三代実録』より、都を中心に、主なものを示せば、

- ① 嘉祥三年（八五〇）七月、大雨大水により山崎橋も破壊。
 - ② 仁寿元年（八五二）八月、大雨による大水害。
 - ③ 「去夏は人民或は坐して魚と為り、今秋は廬宅乍ち涌川と成る」。
 - ④ 仁寿二年（八五二）七月の暴風雨で秋の実りを損ない、閏八月は大風に襲われて、家が倒れ木が抜けるほどの風害。
 - ⑤ 仁寿三年（八五三）二月、「京師及び畿外」で疱瘡が流行、多くの死者を出す。
 - ⑥ 斉衡二年（八五五）五月二十三日、地震により東大寺の大仏の頭が落下。
 - ⑦ 斉衡三年（八五六）三月、都と城南に大地震と余震が頻発。
 - ⑧ 六月二十五日、藤原良房の妻で、嵯峨天皇皇女の源潔姫が薨去。
 - ⑨ 七月三日、藤原良房の兄である権中納言藤原長良が薨去。
 - ⑩ 天安元年（八五七）、地震が頻発、七月には再び都に大地震。
 - ⑪ 天安二年（八五八）五月二十二日、大雨大洪水が都を襲い、全国では旱魃。
 - ⑫ 八月二十七日、文徳天皇崩御。
- といった状況で、ほぼ毎年、深刻な災害に見舞われている。このような災害に対して、八幡宮祈念の例を挙げれば、②の大水害の後、攘災のために十月十一日に勅使を遣わして香椎・八幡大菩薩宮に奉幣しており、④の疱瘡流行の際には、五月十三日に大宰府

に命じて、観音寺・弥勒寺・四王院・香椎廟・各国分寺で大般若経を讀ませている。弥勒寺は宇佐八幡宮の神宮寺である。

そんな中で朝廷を慌てさせたのが、東大寺大仏の頭が落ちるといふ事態だろう。東大寺は国家にとっての主要寺院の一つであるだけでなく、かつて、聖武天皇の大仏造立の際には、八幡神が天神地祇の神々を率いて協力する旨の託宣をし、奈良に入京して大仏を押し、たという経緯があるからである。六月七日には参議藤原氏宗を遣わして大破の状況を確認し、七月二日には聖武天皇陵（佐保山陵）に報告。さらに、九月六日には少納言利見王を勅使として八幡大菩薩宮に遣わし、大仏修理の護助と天下の平安を祈らせた。破損状況は深刻で、修理といっても、ほとんど「新造」に近く、地震が続く中、修理東大寺大仏司検校に任せられた伝燈修行賢大法師位真如と長官の大納言藤原良相が中心となり、大プロジェクトが始まった。

だが、翌斉衡三年（八五六）三月に、都と城南に大地震と余震が頻繁に起こり、屋舎は壊れ、仏塔は傾くという大惨事となった。五月二十三日には聖武天皇山陵に勅使を遣わして策命を讀ませ、なかなか進まない大仏修理の怠りを詫びている。天皇家の祖霊の怒りを恐れ、地震による被害の後始末に追われながら、六月十四日には名僧二百六十五人を請じて、十四箇寺に「七日間を限って、写すところの一切経を三遍讀ませた」。佐伯有清氏は、この十四箇寺の仏事

を「災疫を攘うためか」とする^②。ただ、「七日間を限って、写す所の一切経を三遍讀ませた」とは、単なる一切経の転読ではなく、「写した所の一切経の各經典の一部をそれぞれ三遍、七日間にわたって讀ませた」の意味だろうか。あるいはこの時点ですでに、文徳天皇や良房・良相たちは次の一切経書写を考えていたのではないか。保立道久氏は、仁明天皇時代の地震事情について、

単なる偶然とはいえ、仁明の即位とともに京都の有感地震も徐々におさまる様子を見せた。即位してから三年の間は地震が一度のみ。在位中の京都有感地震の年間平均も2・5回ほどで、他の天皇と比較すると例外的に京都は平穏だった。

と述べている^③。淳和天皇が即位した年、恵運は勅命で一切経書写の検校を行ったが、『安祥寺伽藍縁起資財帳』において、恵運は「坂東で」としか記さない。ただ、『続日本後紀』承和元年（八三四）五月十五日条には、仁明天皇の勅命として「相模・上総・下総・常陸・上野・下野等国」の国司に一切経一部の書写・貢進を命じたが、書写のための原本は上野国緑野郡の緑野寺にあるという。緑野寺は鑑真和尚の弟子道忠の創建といわれ、この原本が恵運の検校した一切経だとすれば、弘仁九年（八一八）七月に北関東を襲った大震災の復興事業だっただろう。これをもとに承和・仁寿の三度の一切経書写が東国で分担・京進され、斉衡三年に転読されたと思われる。

また、淳和天皇の代では特に地震が多く、天長四年（八二七）は京都を中心に計四十五日の地震の記録があり、「大動」「声雷の如し」と激震を表す大地震が繰り返され、多大な被害を被る。東大寺の大仏もすでにこの時期に揺らいでおり、八月十五日に「固め奉る」ことを聖武天皇の山稜に報告している。大地はさらに揺れ続け、天長六年（八二九）三月の大地震の後、五月に八幡大菩薩宮寺で十人の僧により、一切経の転読が始められるのである。おそらく一切経の書写もその頃から始まったと思われる、恵運が最終的に一切経書写を勾当し、仁明天皇が即位した年に、弥勒寺と神護寺に納めている。再びの斉衡三年三月の大地震の後、「仁明天皇の時には書写した一切経を八幡大菩薩に奉納した功德で平穩におさまったのではないか」という意見も出たのではあるまいか。ちょうどこの頃、恵運は承和九年（八四二）に入唐して帰朝してから、文徳天皇の生母、藤原順子の帰依を得て、嘉祥元年（八四八）順子の発願で安祥寺を建立し、開基となって、存在感を示していたこともある。

かつて、聖武天皇は八幡神入京の年に、十二天寺の大修多羅衆に對して、一切経転読・講説の永続を命じ、その料として修多羅供を施入している。大仏修復にあたり、天平時代の記録を参考しつつ、当世に合った方法を模索しながらであるなら、一切経書写の発願は、変則的な踏襲にもなるだろう。北関東大震災に際して、嵯峨天皇も

「地震と疫病」について、「天平の時代を手本とすべし」と述べている（『類聚国史』地震、弘仁九年九月十日）。天然痘の大流行に苦しんだのも、聖武・嵯峨・文徳の時代であった。

しかし、それから不幸は続く。藤原良房の妻源潔姫、兄である権中納言藤原長良の死去、翌年の天安元年（八五七）も地震が頻発し、七月にはまたしても、大地震が都を襲った。さらに、天安二年（八五八）五月には大雨大洪水が都を襲い、全国では早魃で苦しんだ。そうした中で、八月二十三日に文徳天皇が倒れて言語不通となり、二十七日には崩御となった。「倉卒に不予の事あり。近くに侍る男女、騒動し精を失う」とあるから、予想されていなかったであろう。『文徳実録』の最後には、「聖体は弱く病気がちで、頻りに政務を廢した」とある。病弱ではあったが、まだ三十二歳と若いだけに、周囲の回復への期待も強かったと思われる。護持僧の真済は冷然院でつききりで看病したが、文徳天皇が亡くなった時には「時論嗷嗷」で、非難の声に真済は失意のまま、神護寺に隠居してしまふ（『三代実録』）。災害と疫病は人民を失い、物を失い、飢餓と新たな病気の流行の連鎖を呼ぶ。多事多難で国力も疲弊しきった中で、東大寺大仏の修復完成と一切経書写は清和の代に持ち越されることとなった。

『江談抄』（類聚本・巻二）には、文徳天皇が第一皇子惟喬親王に

位を譲りたいと望みながら、藤原良房に憚り、神仏に起請したという。真濟僧正は惟喬親王の祈りの師であり、真雅は春宮惟仁親王の護持僧だったために、対立関係にあったと伝える。文徳天皇の惟喬親王への讓位願望は、早いもので『李部王記』（『大鏡 裏書』）に記載がある。が、重明親王に語ったのが藤原実頼で、承平元年（九三一）

一）といえ、八歳の朱雀天皇が即位したばかりの頃で、この時期の藤原氏が置かれた状況を勘案する必要がある。今は事の真相は措くとして、真濟が文徳天皇の厚い信頼と破格の待遇を受けていたこと、真雅が藤原良房の意を受けて、惟仁親王の幼少時から春宮の護持僧であったことは事実である。『三代実録』貞観二年（八六〇）の真濟卒伝などによると、仁明天皇は真濟を権律師に抜擢し、文徳天皇の代では少僧都となつて、すぐに大僧都に転じ、疱瘡の流行した仁寿三年（八五三）には、金剛峯寺と対等に年分度者三人を神護寺に許される。斉衡三年（八五六）文徳天皇は真濟を僧正にしようとして、真濟は故空海に僧正位を譲ることを願ひ、天安元年（八五八）に空海は大僧正位を追贈された。また、仁明天皇は、高雄の神護寺に一重宝塔を建て、五大虚空藏菩薩像を造立・安置している。文徳天皇の崩御は、護持僧としての真雅の時代がきたことを意味し、真雅が宇佐宮使に行教を推薦したというのは、行教が真雅の周辺にいたことを暗示しよう。清和天皇の春宮時代の護持僧には、も

う一人、宗叡がいた。石清水八幡宮の系図の多くは、大安寺の行表を師とするが、宗叡を行教の師とするものが一本ある^④。行教の弟とされる益信（八二七〜九〇六）は、大安寺で出家し、元興寺明詮に師事して法相宗を学んだ後、真雅に真言を学び、真雅の死後は宗叡に師事したという。

そして、真濟が神護寺に隠居してしまつた以上、藤原良房と清和天皇は、八幡大菩薩への奉仕という点で、八幡大菩薩が建てさせた神護寺というツールを失うことになる。行教が宇佐八幡宮での読経と一切経書写の任務を持ちながら、宇佐で八幡大菩薩の示現を受けて都に戻り、石清水山に八幡宮の建立が即時に許可され、早速に木工寮の役人を派遣して建築を始めるのは、朝廷の側にすれば、神護寺に替わり、都に近く、より直接的に八幡神に対峙できるメリットがあつたからではないだろうか。仁明天皇の承和八年（八四一）五月には、阿蘇の神靈池の異変や伊豆の地震は、「旱疫の災及び兵事有るべし」という卜占結果があり（『続日本後記』）、八幡・香椎は攘災疫の祈りの対象となるようになった。いふなれば、東大寺大仏の大破と、大地震・うち続く水害・早魃・疫病などの災害に、文徳天皇の崩御・清和天皇の即位という不測の事態が重なつた上での、八幡大菩薩対策として行教は起用されたのではないだろうか。さらに、大仏御頭供養の前に「八幡大菩薩が都近くに遷座する」とは、

天平の東大寺大仏造立の最中、開眼供養の前に八幡神が入京するというパフォーマンスの変則的な再来でもある。

四、修多羅衆と南塔院・塔中院

天平感宝元年（七四九）閏五月廿日、聖武天皇（太上天皇沙弥勝滿）は大安寺・薬師寺・東大寺・元興寺・興福寺以下、十二大寺の大修多羅衆に華嚴経を本として一切大乘小乗経律抄疏章等（「一切経」の転説・講説の永続のために修多羅供の施入を行った。修多羅衆とは一切経（「大蔵経」）の管理や研究を行い、読経・講説を行う学僧集団で、そのメンバーは南都六宗の僧と重なりと考えられている。その活動のための料が修多羅供である。

『日本霊異記』（中巻第24縁）には、大安寺の修多羅分の銭を借りた磐島が、冥界・閻羅王の使者である鬼に牛一頭と引き換えに命を助けてもらい、鬼の免罪のために、大安寺南塔院に参り、僧仁燿を請じて『金剛般若経』百巻を読んでもらう話がある。また、『日本霊異記』中巻第28縁では、貧しい女が与えられる銭に、「大安寺の修多羅供銭」「大安寺の常修多羅供銭」「大安寺の成実論宗分の銭」がある。天平十九年の大安寺資材帳にはすでに修多羅銭が存在し、このことから、堀裕氏は、天平感宝元年に修多羅衆が大修多羅衆と常修多羅衆（もとの修多羅衆）に分かれたと見る。堀氏は、

○大修多羅衆は一切経を基礎に、各寺の六宗などを統括、十一世紀以降にも興福寺や薬師寺では、学僧集団の中核に位置していた。

○大修多羅衆は、寺内僧尼の学習の場でもある安居との関連も指摘されている。

などという先行研究の成果から、「常修多羅衆もまた、一切経を基盤に、經典の講説を担いうる僧侶育成を指すものであったと推測される」と結論付けた。^⑤

そこで問題は、南塔院である。『法隆寺東院縁起』（上宮王院縁起）に引く官符によれば、大安寺では撰論宗と修多羅宗が精舎を構成していることに倣い、東院建立が許されたことを記す。天平十九年二月十一日付の奥書を持つ、大安寺の資財帳には、寺地としての塔院の名はあっても、「南塔院」の記述がない。『法隆寺東院縁起』では、天平十九年十二月十四日の僧綱牒を引いていることから見て、修多羅衆のための「精舎」は天平十九年に建立されたものであろうか。とすれば、『日本霊異記』（中巻第24縁）の内容から勘案して、この「修多羅宗のための精舎」が南塔院ではなかっただろうか。天平の資材帳では大安寺がすでに一切経を所有していることが知られるが、南塔院は一切経の研究センターとして機能していたのではないか。大安寺の入唐留学僧戒明は、宝龜九年（七七八）に遣唐使と

ともに帰朝したとみられているが、多くの仏典とともに、中国で「観音の化身」として名高い宝誌和尚の像を請来し、その像を「南塔院中堂」に安置したことが『延暦僧録』に記されている。

もう一つ、大安寺の修学の間と見られるのが、塔中院である。弘仁五年（八一四）の春、最澄は入唐留学の折の願を果たすために筑紫国に赴き、宇佐の八幡宮で法華経を講じて、これに感嘆した八幡大菩薩は最澄に紫袈裟・紫法衣を最澄に奉った。^⑦翌年の三月、桓武天皇が和氣弘世に命じて、最澄が請来してきた「天台法文」を新写させたものが完成し、嵯峨天皇は七大寺に安置して、学ばせることとした。その関係であろうか、和氣氏の請により大安寺塔中院で、最澄は法華経を講ずることとなる。和氣弘世はすでに故人となっていたように、^⑧「和氣氏」は和氣真綱・仲世の兄弟と考えられている。諸寺の碩学が参集したといひ、これは、天長元年（八二四）に大安寺別当平等の上表により、大安寺で八月に法華会を始めるきっかけとなり、立義に及第した者は興福寺の維摩会に准じ、安居講師となることができるようになった（『類聚三代格』巻二）。

『三玉絵詞』では、三月の「高雄法華会」は和氣弘世・真綱たちが、高雄山寺に最澄を招いたことに始まると伝える。石清水別当幸清撰の『諸縁起』に引く「大安寺塔中院縁起」によれば、塔中院には五間四面の御堂と二重高樓と竈屋があり、二重高樓の上階には大

菩薩絵像、下階には一切経を安置し、蔵に「修多羅供」を置いたという。この修多羅供は、縁起の本文では「常修多羅供」となっており、日夜読経する碩学三十人は常修多羅衆であることになる。『神護寺略記』に引く承平実録帳によれば、神護寺にも空海筆と伝える八幡大菩薩の絵像があり、塔中院とのつながりを暗示しよう。そして、南塔院と塔中院はそれぞれ、行教の僧房とも、行教建立とも伝えるのである。

五、行教と修多羅衆

『七大寺日記』や『七大寺巡礼私記』などには、古老の伝として「石清水の根本」と呼ばれる井戸が記される。東室の井戸のそばにある第四室が行教の僧房で、井戸の名前が「石清水井」だったことから、石清水房と呼ばれ、宇佐から帰った行教は、ここから八幡大菩薩を男山に遷座したという。「石清水八幡宮」の名前の由来伝承である。

『今昔物語集』巻十二第10話（以下『今昔』）では、行教は宇佐から八幡大菩薩を奉じて、まず自分の僧房の南塔院で丁重に祀り、その後の託宣により、男山に八幡宮を建立したという。また、神がおわしました所なので、と大安寺境内にも八幡宮を建てた、という。

『大安寺塔中院縁起』においては、大同二年（八〇七）に入唐帰

朝した行教が、宇佐八幡宮で示現を得て、まず石清水房に來着、それから塔中院と八幡宮を建て、その後、託宣により男山に八幡宮を建立したという。

いずれが本当か、この三系統の伝承の分析と考察は別の機会に譲るとして、どれもが大安寺側から語る石清水八幡宮建立の由来であり、石清水八幡宮創建縁起の一種として分類できる面がある。また、これらの言説の基底に共通するのは、「大安寺の僧房で祀つてから行教が石清水八幡宮を建てた」という点であろう。行教の生涯に関しては、歴史学でいう一級史料に生前のものがなく、没した地すらわからない。また、八幡宮を建てる期間中、行教がどこを拠点としていたか、八幡宮を建ててからも、どこにいたのかを伝える資料が、現在に残る石清水文書の中にも見当たらない。

石清水八幡宮の文書類には行教の僧房や庵に関する伝承がない。長徳の『遷座縁起』によれば、すでに存在した石清水寺という山寺（『薬師堂』を、東面から南面に改めたという。『石清水八幡宮末社記』によれば、貞観四年十二月二十三日太政官符に、「石清水寺」を「護国寺」に改める勅許を出しているという。東向きを南向きに変える工事が、新しい神殿にふさわしいように改築するためだとすれば、貞観五年一月には行教は没したと思われるので、護国寺に落ち着く暇もなく、逝去したわけである。

もともと山寺であるなら、さほどの規模とは思われない（現在残る跡地も決して広くはない）。石清水の縁起では、行教は貞観三年正月に宇佐で読経の後、鎮護国家のために奏聞を経て、国ごとの諸明神に僧としてそれぞれ一人ずつ遣わすための三十三人の得度者と、石清水八幡宮のための祈願僧として得度者十五人分を申請している。石清水寺が行教の本拠地で、石清水寺から度者から出すなら、この数は考えられないであろう。

だが、行教が大安寺の「修多羅衆」の末裔の一員であるなら、ある程度、謎が解けてくる。そもそも、石清水の縁起を見る限り、行教は読経・読誦に長けていた。貞観二年、石清水の宝殿が完成した後、十一月二十六日に宣旨を蒙つて再び宇佐に下り、貞観三年正月三日から二十七日までの間、百人の僧を率いて宇佐で大規模な読経をするのは、宝殿が無事完成したことへの報告・感謝とともに、ほぼ完成していた大仏の御頭供養が三月十四日に無事に行われることを祈念したのではないか。一月二十一日に朝廷は、東大寺大仏の修理が終わったので諸国へ通知し、「八幡大菩薩が解脱を得、諸余の名神の力が自在になるよう、聖武天皇・文徳天皇、それ以前の天皇の御霊のため、また、清和天皇の御代が気候に恵まれ、豊作になるよう、諸国の国分寺で齋会を行う」ように、との通達を出している。聖武天皇の時、八幡大菩薩が主となって「天下の名神及び万民

が知識衆となつて」大仏完成に至つたことにちなんでのこと、行教が国毎の明神の祈りのために三十三人の得度者を望んだのも、このことと関連しよう。

つまり、行教の本拠地はやはり大安寺という巨大寺院であり、「修多羅衆」もしくは「大修多羅衆」の末裔として、一切経に詳しかったからこそ、一切経書写も任せられたと思われる。南塔院や塔中院と行教が結びついて語られるのは、そこに由来するだろう。行教の遺業を受け継いだ弟子安宗も伝燈大法師位になっており、彼もまた一切経書写を担当できるだけの力量を持っていた修多羅衆の一員であつたかもしれない。安宗が私財を投じて、石清水山の麓に極楽寺を建てたのは、約二十三年後の元慶七年（八八三）のことである。

『東大寺要録』『供養章』の「御頭供養日記」では、開眼供養の舞樂に「喜春樂」が二十人で舞われたことを記す。『教訓抄』三では、「古老伝」として、「喜春樂」の曲は大安寺住僧の安操法師が作つたという。また、「古記」には行教が八幡大菩薩を石清水に遷座するときに、夢の告げにより、寿心樂という曲を作つたが、これが今の喜春樂だという。伝承そのものは信用できないが、「大安寺住僧の安操法師」は、行教の弟子で石清水初代別当の「安宗」を想起させる。僧が「出家した神」を遷座するのだから、石清水山新宮で、神事とともに、音楽を伴う法会も行われた可能性は十分ある。南都の

楽人に伝え続けられたのは、遷座の儀式に南都楽人たちが召請されたからであろうし、その記憶がこのような伝承の形で残つたとすれば、その法会では大安寺や南都の僧が協力したことを想像してもよいのではないか。その意味で、『東大寺雜集録』卷一の清和天皇の代に「八幡大菩薩。大安寺並勇山ニ移り給。又二年十月八日ト云」とある記事は、石清水宝殿の遷座式が貞観二年十月八日だつた可能性を示唆しよう。おそらく木工寮役人として石清水造宮の中心を担つたと思われる木工大允和氣朝臣彝範は、十一月十六日に正六位上から従五位下に昇叙され、同二十六日には、行教は新たに宣旨を得て、左大臣から「僧百人を率いて、宇佐宮で説経せよ」と命じられる流れと、時期が合うからである。

聖武天皇の時代の大仏開眼供養に参加した五寺は大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺・東大寺だが、貞観三年三月の開眼供養にも、「諸大寺音楽」でこの五大寺と法隆寺とが奉仕している。この日は、十五大寺でも盛大な供養が行われ、大安寺の大仏（高さ九丈の大仏の画像）の前では、諷誦が行われた（『東大寺要録』供養章、恵運僧都記録文¹⁰）。東大寺大仏の開眼供養の導師は、かの恵運僧都であり、恵運自身が書いた「記録文」によれば、「大安寺の僧綱」だつたようである。

『七大寺巡礼私記』には、『年代記』（未詳）という書では、斉衡

二年に行教が宇佐から八幡大菩薩を奉じて戻り、大安寺八幡宮を建立したとあると記す。しかし、石清水井系統の伝承も、『今昔』も僧房に祀ってから石清水八幡宮を建立したとは言っても、先に大安寺に八幡宮を建てたとは言わない。むしろ、この斉衡二年説は、おぼろげながらも、東大寺大仏修復の始まりとともに、行教の動向も記憶されていたことによるのではないだろうか。

おわりに

本稿は一切経と行教の関係を追う形で、行教が石清水八幡宮を建立するに至る歴史的背景を考察してきた。藤原氏が権力を握ってゆく過程の中で捉えるだけでなく、東大寺大仏と災疫を視野に入れれば、一切経書写は嵯峨院・淳和天皇体制の時代から、聖武天皇の代に学びながら、和氣氏の介在によって八幡神に結びついたことがわかる。行教は一切経書写を完遂できず、そのため研究者の関心を呼ばなかったが、南都で活動してきた行教をよく知るのには、やはり南都である。一度廃絶してしまった大安寺には史料が残っていないため、詳しいことは不明ながら、「行教のいる所に八幡大菩薩はおわす」と考えるなら、約一年ばかり、行教とともに八幡大菩薩は大安寺を本拠としていたわけである。実際にどうしていたのかはわからないが、僧房で八幡大菩薩のために行教が読経すれば、神への奉仕

が読経である僧侶たちにとって、それは八幡大菩薩を祀ることと同義であろう。「石清水井」や『今昔』・『塔中院縁起』などが語るものは、「大安寺や南都の僧たちから見た」石清水八幡宮創建の経緯が土壌となって育まれてきた伝承であり、また、その後の石清水八幡宮との関係において、『今昔』も『塔中院縁起』も読み解かれる必要があるだろう。

注

- ① 平野博之氏「東大寺要録所収弘仁十二年官符について（下）」、『九州史学』第二四号、一九六三年、九州史学研究会。
- ② 佐伯有清氏著『高丘親王入唐記——廢太子と虎害伝説の真相——』、吉川弘文館、二〇〇二年発行。なお、牧伸行氏は、承和元年（八三四）五月十五日を最初として、承和二年・承和六年・仁寿三年と、東国諸国に対する書写と貢納の命令が五度出され、その計三部の一切経の供養と見る（『古代東国の仏教と一切経』、『一切経の歴史的研究』所収、佛教学総合研究所、二〇〇四年）。ただし、その原本となった緑野寺の一切経は、堀池春峰氏の説くように恵運の関与があると考えた方が良いように思う（『平安時代の一切経書写と法隆寺一切経』、『南都仏教史の研究』下・諸寺篇）所収、法蔵館、一九八二年）。
- ③ 保立道久氏著『歴史のなかの大地動乱』七八頁、岩波新書、二〇一二年八月。
- ④ 統群書類従卷百六十九『紀氏系図』、第七輯、一八五頁。
- ⑤ 堀裕氏「常修多羅衆成立をめぐる基礎的考察——大寺を支える僧侶組織——」、菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』所収、思文閣出

版、二二〇九年。

⑥ 『法隆寺東院縁起』は問題も多いが、太政官符の記事に関しては、林幹弥氏の見解（『法華修多羅について』、『日本歴史』一九七五年七月号所収）に従う。

⑦ 『伝教大師伝』『比叡山延暦寺元初祖師行状記』『拾遺往生伝』等に記載。

⑧ 佐伯有清著『伝教大師伝の研究』二四二・四三〇頁、吉川弘文館、一九九二年発行。

⑨ 石清水山寺については、上原真人氏の「国境（くにざかい）の山寺——石清水八幡宮前身寺院に関する憶測——」（『京都府埋蔵文化財論集第7集』二一〇六年刊行）参照。

⑩ 大仏御頭供養については、渡辺晃宏氏『平城京と木簡の世紀』（『日本の歴史04』、講談社学術文庫、二〇〇九年）、佐伯有清氏『高岳親王入唐記』（吉川弘文館、二〇〇二年）参照。